

旧ユーゴスラビア諸紛争の連鎖要因

——「人道に対する犯罪」の歴史的背景——

尾 崎 恒

目 次

はじめに

1. 「列強争奪の地」に運命づけられたバルカン
〈民族と文明の坩堝〉
2. セルビアとクロアチアの敵対化
〈西欧化（ドイツ化）したクロアチア〉
〈イリュリア運動〉
3. 「大セルビア主義」の底流
4. 多民族・諸宗教の混在をもたらしたオスマン進出
〈コソボ紛争の歴史的背景〉
〈マケドニアの脆弱性〉
〈山間で戦い抜いたモンテネグロ人〉
5. 「民族」としての「ムスリム」
〈ボゴミール派とは〉
〈特権を温存したボスニア支配層〉

むすびに

は じ め に

あれは1990年10月末、欧州統合へと勢いづくEC(欧州共同体、現在のEU＝欧州連合)諸国を調査旅行中、ブリュッセルでEC主催の立食パーティーに招かれた時のことだ。サラエボ生まれだというユーゴ国営「タンユグ通信」のEC担当記者に、混迷を深めつつあったユーゴ情勢について質問すると、彼は急に自嘲的な表情になり、逆に私にこんな謎掛けをした。

「近い将来、欧州は7つの国で構成されます。どんな構成だと思いますか？」

返答に戸惑う私に、彼はこう答えた。

「ECによって経済・政治統合された1つの欧州合衆国と、ユーゴスラビア社会主義連邦共和国が崩壊して取り残された6つの共和国ですよ。」

旧ソ連・東欧やバルカンなど、言論抑圧下にあった共産党独裁諸国では、政権や社会情勢を痛烈に風刺するアネクトート（小話）が、酒場などで小声で交わされたものだ。このタンユグ記者も、本国で流行っていた小話を紹介してくれたのだろう。

90年10月末といえば、「ベルリンの壁」が崩壊して11か月が経過し、ドイツ統一が実現した直後である。ECは経済・政治統合への「深化」と、共産党政権崩壊後の中・東欧諸国迎え入れの「拡大」、いわゆる「ECの深化と拡大」の検討に本腰を入れ始めていた時期である。

一方、ユーゴスラビア連邦では、北部先進地域のスロベニア、クロアチア両共和国が、社会主義を国是として「共産主義者同盟（共産党）」を指導政党に定めた連邦憲法を無視して初の複数政党制の自由選挙を実施し、両共和国ともナショナリズムの異様なほどの高揚のもとで、連邦からの離脱を唱える非社会主義政党が大勝した。その結果、セルビアが主導権を握る連邦政府との対立が深まっていた。

だから、このタンユグ記者もきっと、この政治小話がジョークどころではなく、早晩、似たような事態に直面するのではないかと感じていたに違いない。が、連邦崩壊は起こり得るにもせよ、半世紀以上も多民族の平和共存をなんとか維持してきたユーゴで、第二次大戦前や大戦中の民族間憎悪が、悪霊のように甦り、集団虐殺、集団レイプなどを伴った凄惨な内戦の連鎖反応を呼ぶとは、夢想だにしなかったと思う。

私がこの小話を聞いた8か月後の91年6月末、スロベニア、クロアチア両共和国がほぼ同時に独立を宣言すると、連邦政府は両共和国の独立を阻もうと、まず、人口わずか200万の弱小共和国であるスロベニアに対して、手荒な軍事介入に踏み切った。この介入事件は、ECの調停努力により一応、収まったもの

の、翌7月にはクロアチアで共和国警察隊と連邦軍が衝突し、大規模な武力紛争に発展した。そして、クロアチア紛争が同年末に国連などの調停努力によって、ほぼ終息すると、紛争は92年4月、ボスニア・ヘルツェゴビナ共和国に飛び火し、3年半にも及ぶ凄惨な戦闘が続いた。300万人にのぼる難民を生んだ。

また98年2月には、2共和国のみが取り残された新ユーゴ連邦内のセルビア共和国コソボ州で、コソボ独立を唱えて決起したアルバニア系人と連邦軍が衝突するコソボ内戦が勃発し、戦闘で優位に立ったセルビア人勢力によるアルバニア人に対する集団虐殺などの残虐行為が行なわれていると、世界中に報じられた。99年3月、北大西洋条約機構(NATO)は、戦争犯罪の継続阻止と平和回復のために、大掛かりな空爆による軍事介入に踏み切ることになった。

そして、新ユーゴ側が屈服する形で、平和回復を目的とする国際部隊(KFOR)のコソボ駐留が実現した後も、紛争はくすぶり続け、隣国のマケドニアに飛び火した。国際社会の努力で、武力衝突は鎮静化したものの、なお、予断を許さない状況が続いている(2002年2月現在)。

これら一連の旧ユーゴ紛争には、(スロベニア紛争を除いて)極めておぞましい共通性がある。民間人をも含めた集団虐殺、(民族間憎悪の発露としての)集団レイプ、敵対民族の集落の完全破壊、集団追放といった反人道的な戦争犯罪、いわゆる「民族浄化(ethnic cleansing)」が、ほぼ公然と行なわれた事実である。

これらの残虐な戦争犯罪は、国際社会、とりわけ欧州市民に、極度の衝撃と倫理的な自信喪失をもたらした。第二次大戦終了後の(ナチス戦争犯罪を裁いた)ニュルンベルク裁判によって、欧州市民は、少なくとも欧州社会においては、組織的な虐殺、虐待といった戦争犯罪が再発する可能性を絶ったと信じていたからだ。旧ユーゴ地域の戦争犯罪は、人権尊重と民主主義信奉に対する重大な挑戦だった。

このような共通認識から、93年5月、「人道に対する罪」を犯した個人を処罰する目的で「旧ユーゴ戦犯国際法廷」がオランダのハーグに設立され、これまでに90人以上が訴追されているが、虐殺などの最高責任者たちは逮捕すること

が出来ず、この国際法廷の権威が危ぶまれ始めていた。しかし、2000年10月の新ユーゴ連邦の政変で、長期独裁体制を敷いていたミロシェビッチ（連邦大統領）政権が倒れて後、ハーグ法廷への期待は急速に高まった。ユーゴ連邦新政権が2001年6月末、コソボ紛争の際の残虐行為などの最高責任者として99年5月以来、国際法廷から訴追されていたミロシェビッチ氏をハーグ法廷に引き渡したのである。こうした新情勢の下、クロアチア政府にも変化が兆し、「大物戦犯」の引渡しが行なわれ始めた。「人道に対する罪」の問題が、いま、ようやく正面から論じられようとしている、とも言えよう。

この論文では、上述したような旧ユーゴ諸紛争の特殊性、重大性を視座に据えて、以下の2つのテーマについて考察を進めたいと考える。

- (1) 旧ユーゴ連邦解体過程に諸紛争が連鎖的に発生した要因は何か？
- (2) 非人道的な「民族浄化」はなぜ起きてしまったか？ その要因は何か？

こうした問いの答えを探るプロセスとして、まず、バルカンの地政学的特殊性、歴史的経緯について、考察を進めねばならない。従って、諸紛争そのものの経緯や、これらの因果関係などについて詳細に分析する作業は、後の論文発表の機会にまわすことにし、本論文では、18世紀頃までの歴史的経緯、特に、旧ユーゴスラビア地域がなぜ多民族、諸宗教の混在地域となり、民族間憎悪が育まれてきたかという問いに焦点を絞って、考察と分析を進めたいと考える。

なお、筆者は、1974年から76年まで読売新聞の東欧担当記者としてプラハに駐在し、その間、度々、ユーゴ各地の調査旅行を重ねた。また、その後の計6年にわたる欧州駐在（ジュネーブ、ボン）中も、旧ユーゴ各共和国を数回にわたり現地調査した。さらに、（国際問題担当・論説委員当時の）96年には、明石康・国連事務総長特別代表の招きで、紛争の続くボスニア、クロアチアなどを現地取材する機会を得た。本論文の記述が、こうした筆者の現地体験に大きく依拠している関係上、時として、学術論文の範疇を越えた主観的記述のように映る個所もあろうかと懸念される。だが、筆者は紛争当事者、関係国、国際機関の立場を中立的視点で捉え、かつ十分な論拠を掲げながら執筆に努めたつも

りである。この点を、ご理解いただきたい。

1. 「列強争奪の地」に運命づけられたバルカン

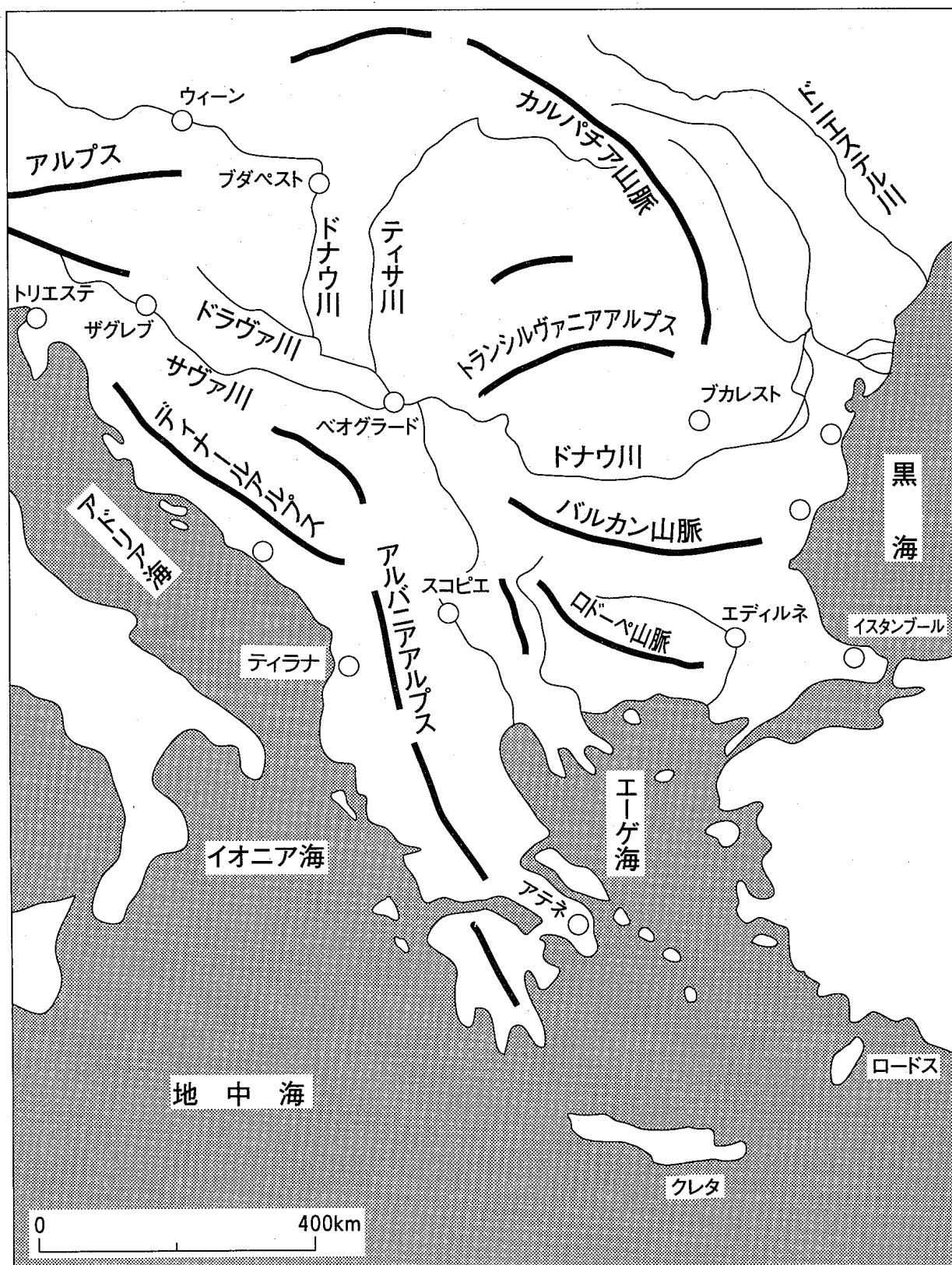
「バルカン」とは、トルコ語で「山」もしくは「山脈」を意味する。その名の通り、極めて山岳地帯の多い半島である。ブルガリア中央を東西に走るスターラ・プラニナ（通称バルカン山脈）、ブルガリア南西部からギリシャ北東部にまたがるロドーピ山脈、旧ユーゴ連邦西部のディナールアルプス、ルーマニアのトランシルヴァニアアルプス、アルバニアアルプスなどが半島を縦横に走っている。

しかし、川沿い、峠越えなど、古くから交通路は拓けており、東西、南北文明が交流する「交差路」となった。そして、「諸文明の交差路」とは、「諸文明衝突の交差路」だったことをも意味する。バルカンは、オセアニア大陸における地理的な位置と特殊な地勢ゆえに、各時代の列強の衝突と、覇権争いの地となるべく運命付けられていたと言えよう。

バルカン地域は、一般には、北はドナウ川とサヴァ川までの地域とされているが、旧ユーゴ連邦の存立中は連邦北部までをバルカンに含めて呼ばれることが多かった。つまり、広義には、ヨーロッパ・トルコ、ギリシャ、アルバニア、ブルガリア、ルーマニア、新ユーゴ連邦のセルビア、モンテネグロ両共和国、旧ユーゴから離脱したクロアチア、スロベニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、マケドニアが含まれていた。だが、旧ユーゴ連邦解体後は、旧連邦北端のスロベニアをバルカンの一部とみなすのは当然ながら不自然で、中欧の国家とみなすべきである。ルーマニア、ブルガリアも国土がバルカンにまたがるにせよ、東欧の国家と考えるべきだろう。地中海の島々を領有するギリシャはバルカンに属すると同時に、地中海文明を基盤とする「地中海国家」としての色彩が強い。

〈民族と文明の増埒〉

バルカン半島の原住民については、いまだ明確には論証されていない。紀元



バルカン半島の地形

前 2000 年頃からギリシャ系諸族が北上し、原住民を駆逐して定住したとされる。たとえば紀元前 3～4 世紀の時代はギリシャ人、アルバニア人の祖先とも言われるイリュリア人や、トラキア人、マケドニア人（現在のマケドニア人とは異なる）などが主要民族だったとされる。

だが、紀元前 2 世紀頃からローマの影響力が強まり、古代マケドニア王国がローマに滅ぼされて以後は、バルカン広域が次々とローマの属領となり、ラテン語を用いる種族も増え、「バルカンのローマ化」が進行した。

しかし、3 世紀には西ゴート族侵入のためローマ帝国がダキア地方から撤収するなど、ローマ帝国のバルカン支配が弱まった。ローマ帝国は 325 年、首都がビザンティウム（後のコンスタンティノープル）に移され、4 世紀末に東西分裂し、西ローマ帝国は 476 年に滅亡した。ビザンツ（東ローマ）帝国はその後、バルカン地域の支配圏保持に努めるが、帝国自体がアラブなどの攻撃を受けるなど、バルカン統治に手が回らず、ゲルマン大移動の時期には、バルカンはゲルマンの通過路として欲しいままの略奪が行なわれた。

ゲルマン諸族の怒濤の大移動によって荒廃したバルカンに、6 世紀頃から大陸の北東部からスラブ系諸族が大挙して南下し、ギリシャ系、ラテン系の先住民を駆逐して定住を始めた。現在のセルビア人、クロアチア人、モンテネグロ人、スロベニア人、マケドニア人も、スラブ語系の民族であり、「南スラブ族」と総称される。また、7 世紀にバルカン東部に移住してきたタタール系のブルガル（ブルガリア）人は一時、東ローマ帝国をも脅かす強国を築いたが、支配下に置いた多数派のスラブ人との融合によってその後、完全にスラブ化した。このため、ブルガリア人も、「南スラブ族」に含まれている。

こうした、ギリシャ化、ローマ化、スラブ化による「文化混交の圧倒的な影響」がバルカン原住民の言語学的、文化的痕跡をほとんど消し去ってしまったのだと、ドイツの歴史学者、言語学者であるエドガー・ヘッシュ氏は指摘¹⁾して

1) エドガー・ヘッシュ、佐久間穆訳『バルカン半島』、みすず書房、1995 年、p. 18

いる。

バルカンの「文化混交」は、これらにとどまらない。その後の、ビザンツ帝国と神聖ローマ帝国によるバルカンの覇権争い、宗教的にはギリシャ正教（東方正教）とローマカトリックとの熾烈な布教競争、ベネチアによるダルマチア進出、14世紀以降は、オスマントルコの侵攻によるバルカン内陸部の「トルコ化」などにより、バルカンは1地域としてのアイデンティティーを持ち得ない「民族の坩堝」「諸文明の坩堝」となった。

ここで、旧ユーゴスラビア地域が文化的、政治的な一体性を持ち得なかった要因として、バルカンの特殊な地政学的要因を、繰り返し強調しておくべきだろう。

バルカン半島を縦横に走る山脈と深い渓谷は、6世紀以降にバルカンに定着した「南スラブ族」にとって、統一的な政治・文化圏を形成する上で大きな障害となり、このために、周辺からの侵略に対抗し得る強力な国家を築くことができなかった。一方、渓谷や峠などをつないだ交通路は古くから拓けていたため、周囲からの軍隊の侵入、移動にはほとんど妨げにはならなかった。そして、バルカンに進出した大国は、南スラブ諸族を分断統治することで、統治力を強化しようとした。とりわけ、南スラブの最大民族であるセルビアを孤立させ、セルビア人に対する、他の南スラブ族の敵愾心を煽った。こうした結果として、南スラブ諸族が統合への求心力を強めた時期は極めて少なく、近代、現代に近づくにつれて、対立意識や敵対意識を一段と強めさせることになった。

こうした歴史的経緯が、冷戦終結後の「ボスニア紛争」や「コソボ紛争」の背景になっている点を見逃せない。

2. セルビアとクロアチアの敵対化

旧ユーゴスラビアの「南スラブ族」のなかで、最大の民族がセルビア人、第2の勢力がクロアチア人である。因みに、旧ユーゴ崩壊直前の人口約2,300万人の民族比率は、92年版「世界年鑑」（共同通信社）によると、セルビア人

(36.1%), クロアチア人 (19.5%), アルバニア人 (9.2%), スロベニア人 (7.5%), マケドニア人 (6.0%) など、セルビア人、クロアチア人の数が突出していることが容易に理解されよう。他に民族名として「ムスリム (イスラム教徒)」と名乗る人々がボスニア・ヘルツェゴビナだけでも旧連邦人口の8%以上、存在する。

中世以後のユーゴ地域の民族間摩擦は、旧ユーゴ2大民族であるセルビア人とクロアチア人との対立が主軸となり、バルカンの覇権を目指す列強に利用されながら、時代を経るごとに両民族の敵対意識が先鋭化していった。



ユーゴスラビア連邦解体以前のバルカン半島地図

両民族の対立を深めさせた最初の要因は、東方正教とローマカトリックの熾烈な布教競争だったと指摘してよからう。

バルカンに南下してきたスラブ系諸族は当初、キリスト教徒ではなかった。ビザンツ帝国は、バルカン支配を固めるために、ギリシャ正教（東方正教）の布教に努めた。

（注…東西キリスト教会が最終的に分離したのが1054年であるから、それ以前のビザンティン教会や東方のキリスト教を「東方正教」と呼ぶのは正確とは言えない。また、こうした時期に、ローマ教皇を最高の指導者と仰いだ宗派を、さかのぼって「ローマカトリック」と呼ぶのも、適切だとは言えないだろう。しかし、バルカンにおける政治的覇権抗争が、すでに東西両教会の布教競争と密接に絡んで進行していた歴史的事実に鑑み、この論文では、やむを得ず、「東方正教」「ローマカトリック」という用語を使用した。）

バルカンでの布教に情熱を注いだギリシャ人僧侶のキュリロス（スラブ名はキリル）が9世紀、ギリシャ文字を基本にしてブルガリア語で聖書を翻訳し、その弟子クレメントが、ギリシャ語にない音を表記するための文字を補うなどしてキリル文字を完成したとされる²⁾。

このキリル文字によって、東方正教は9世紀以後、バルカンだけでなく、ポーランド、ロシア地域にまで布教され、同時に広域のスラブ系諸族が自分たちの文字として使用した。こうした時期にローマカトリックが浸透していたのは、旧ユーゴ地域最北端のスロベニアや、アドリア海に面し、ディナルアルプスによって半島内陸部と遮断されたダルマチア地方だけだった。ダルマチアのローマカトリック化は、主にベネチア王国の進出によるものだった。

こうした時期には、まだ東方正教圏とローマカトリックとの確執は少なかったが、西欧地域で勢力を伸張したフランク王国のカル王（後のカール大帝）が、800年、ローマ教皇レオ3世からローマ皇帝の冠を授与され（西ローマ帝国の復活）、これにより、教皇の権威とカトリック信仰に依拠した一種の神政が始まったことから、ビザンツ帝国とは別個の宗教・文化圏がバルカン地域にも拡大

2) エドガー・ヘッシュ、前掲訳書 p. 54～56

し始めた。

フランク王国（西ローマ帝国）は、フランク王国の分轄相続により、その後、東西フランクとイタリアに3分割されてしまうが、10世紀に強大化した東フランク王国（ドイツ）のオットー1世（在位936～973）が北イタリアに出兵してローマ教皇を軍事支援し、962年、教皇から帝冠を授けられ（神聖ローマ帝国の起源）、その後はドイツ王が皇帝の称号を受け継ぐことになった。

これによりローマ教会は、ドイツ王の強力な支援のもとに、カトリックの布教を東方へと進めた。カトリックはバルカン半島を南下し、東方正教との勢力争いの様相を強めた。その際、ローマ教皇は、カトリックの影響力を広げる狙いから、諸民族がビザンツ帝国の支配から離脱する運動を支援したため、バルカンに幾つかの民族国家が誕生することにもなった。

〈西欧化（ドイツ化）したクロアチア〉

クロアチア人が定着したバルカン北西部は8世紀以後、ローマ教皇と結んで強大化したフランク王国と、ビザンツ帝国との争奪の地となり、宗教的にもカトリックと東方正教の布教争いの衝突点となった。しかし、9世紀になってフランク王国が衰退し、同時にビザンツ帝国もブルガリア王国などとの戦いに忙殺されて権力の空洞化が生じると、クロアチア人は、政治的結束を強め、欧州諸国やローマ教皇から王国として承認されて民族国家を形成した。さらに10世紀に入ると、クロアチア侯トミスラフ王は、ダルマチア地方まで進出しようとしたブルガリア王国の軍勢を破り、周辺地域を統一してローマ教皇からクロアチア王として戴冠された。こうした時期、クロアチア人はカトリックを受容し、文字もラテン文字が普及し、文化的にも西欧色が強まることになった。

クロアチアはその後、11世紀にはハンガリーの支配を受け、さらに、オスマントルコがコンスタンチノープルを陥落（1453年）させて以後、バルカン半島を北進すると、16世紀にはハンガリーとともに、一時はオスマントルコの統治下に置かれた。しかし、宗教はカトリックを堅持した。

こうした複雑な経緯の中で、クロアチア人も列強による支配、同化に甘んじるのを嫌い、民族的アイデンティティーの維持と自治権の回復を願望し続けた。その主潮となったのが、中世クロアチア王国の再来を目指す「大クロアチア主義」で、ハンガリーなどへの同化を拒む一方で、東方正教のセルビアをも敵視した。この事実が、列強によるバルカン支配を容易にしたし、また近年に勃発した旧ユーゴ紛争の要因となった点は見逃せない。

カトリック（およびプロテスタント）圏を「西欧」、東方正教圏を「東欧」と分けするのは、学問的には大雑把に過ぎるが、西欧市民の間では一般的通念となっているのは事実だろう。クロアチア人も、自らを西欧の歴史と文化に帰属すると感じ、東方正教徒のセルビア人たちと連帯を求めるよりは、違和感と対立感情を次第に強めた。旧ユーゴ地域の歴史は、「大セルビア主義」対「大クロアチア主義」が底流となってきたし、冷戦後の旧ユーゴ連邦解体の過程に連鎖的に起きた諸紛争の底流ともなったのである。

＜イリュリア運動＞

しかし、近代になると、フランス革命の理念などに刺激され、クロアチアの知識人たちの間で、セルビア人など類似言語の民族との連帯のもとに統一的な文化・政治圏を創設しようとする「イリュリア運動」（彼らは当時、自らをイリュリア人の末裔とみなしていた）運動が起こっている。「大クロアチア主義」の潮流に比べると、大衆に浸透し難かったし、見過ごされがちだが、南スラブ族の連帯感を知識人層に芽生えさせ、後にユーゴスラビア国家建設を可能にさせた1要因として、見逃すことはできない。

たとえば19世紀、セルビア人のヴク・カラジッチは、それまではロシア語の影響を強く受けていた文章語を、セルビア口語体を基礎とした文章語として確立しようと尽力した。この運動に、クロアチアで「イリュリア語」の文芸運動を進めていたリュデヴィド・ガイが共鳴し、両者の協力により、文章語としての「セルブ・クロート語」が作られていったのである³⁾

3. 「大セルビア主義」の底流

一方、セルビアは、8世紀から12世紀にかけてブルガリア王国やビザンツ帝国の支配下に置かれ、9世紀末（ブルガリアは10世紀中葉）に東方正教に帰依して後は、東方正教会の強い影響下に置かれた。しかし、ビザンツ帝国による統治に対しては反発を続け、12世紀中葉には帝国支配から脱し、13世紀初頭、ステファン・プルボベチャニがローマ教皇から王の称号を受け、民族国家としての基盤を固めた。

ただし、カトリックはセルビアには浸透せず、13世紀初頭、セルビアはコンスタンティノーブルからセルビア正教会を独立させて、国教と定めた。ローマ帝国による支配は拒否しながら、東方正教（セルビア正教）は保持し続けた。

「中世セルビア王国」は14世紀に最盛期を迎え、ビザンツ帝国をも圧倒した。ステファン・ドシャン王（在位1331～55）は1346年、セルビア正教会総主教から、新都スコピエで「セルビア人・ギリシャ人・ブルガリア人・アルバニア人の皇帝」の称号を授けられている³⁾。

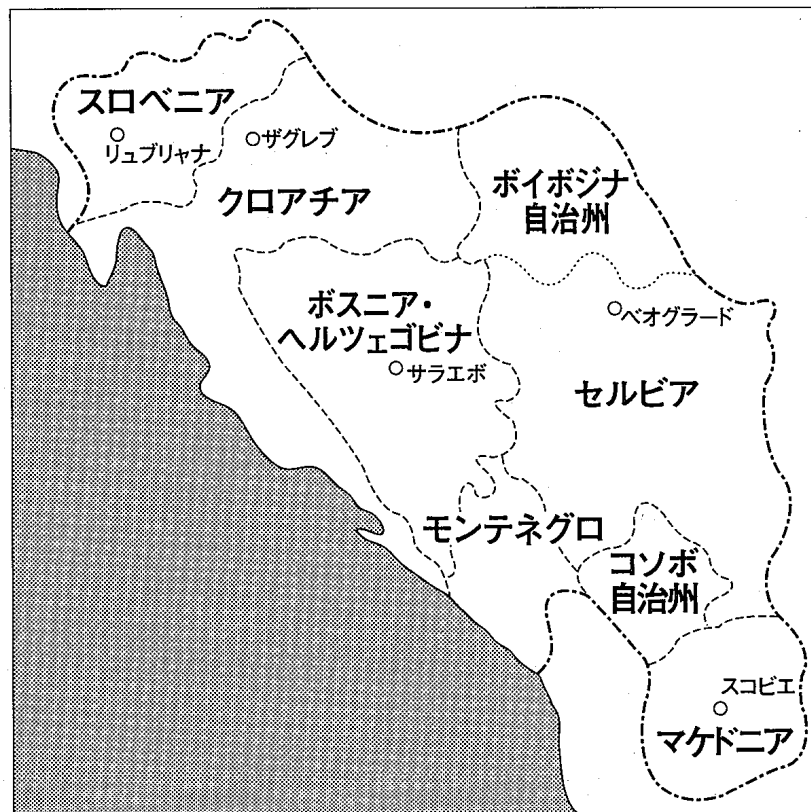
だが、1355年のドシャンの死後、セルビア王国は内紛などによって衰退の道をたどった。この「中世セルビア王国」の短期間の繁栄が、セルビア人の民族の誇りとアイデンティティーを、現代に至るまで維持させる拠り所となっている。

セルビア王国のバルカン支配が弱まった時期にバルカン進出を試み、成功したのがオスマントルコである。13世紀末に小アジアのアナトリア西部で勃興したオスマン朝は、14世紀中葉には、バルカン半島の東南端部のアドリアノーブル（トルコ語ではエディルネ）に首都を構えて、バルカンの支配地域を広げた。このため、セルビア王国とオスマントルコとの軍事対決は必至となった。

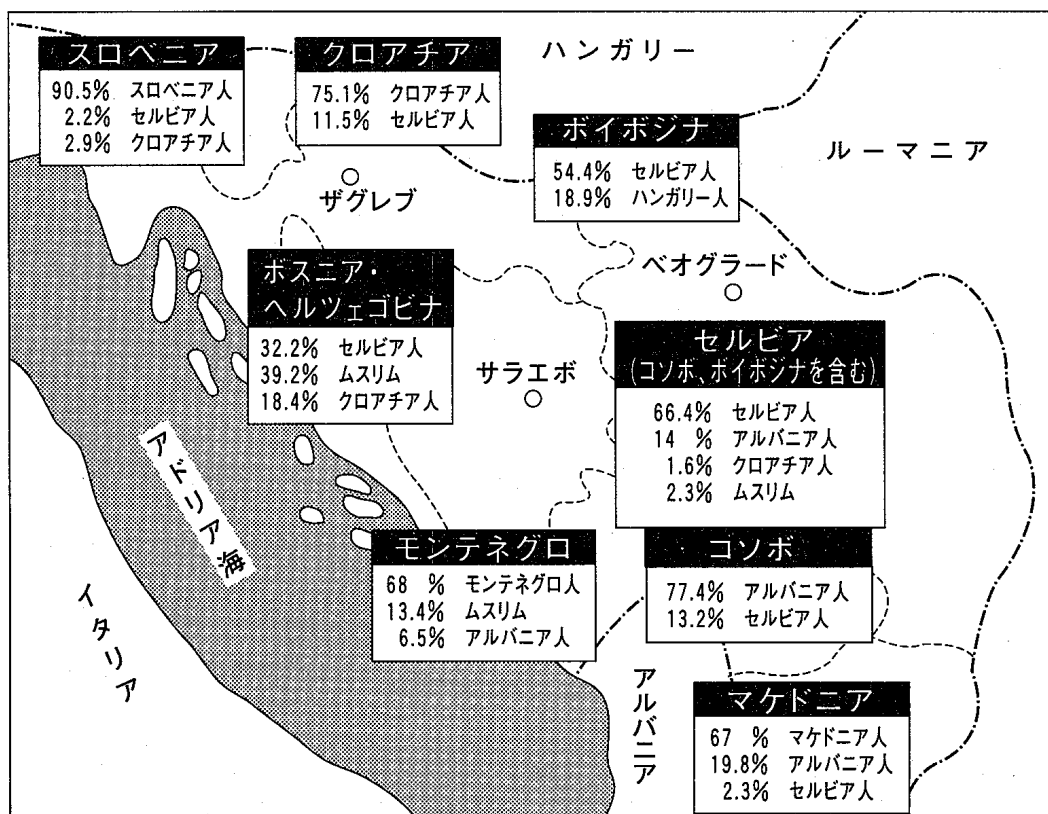
セルビア王国は、1389年、ボスニアとワラキア（現在のルーマニア南部）な

3) 柴宜弘編、『新版世界各国史 18—バルカン史』、山川出版社、2000年、p.187

4) 田中一生、『世界大百科事典、「バルカン」の項』、日立デジタル平凡社、1998年



解体以前のユーゴ連邦地図



(英紙「ガーディアン」1990年10月5日付より)

どの諸侯と連合軍を結成し、オスマントルコ軍との「コソボの戦い」に王国の存亡を賭けたが、決定的敗北を喫し、セルビア王国は事実上、滅亡した。この決戦でオスマンに敗れた主因は、セルビアとボスニアとの対立関係等が、連合軍の結束を乱したためだったとの指摘も多い。

セルビア人は、中世セルビア王国の滅亡を招いた「コソボの戦い」の悲劇を描いた叙事詩を吟詠詩人などが伝承し、英雄的な戦闘と、悲惨な敗北を現代にまで伝えてセルビア人のアイデンティティーを保ち続けた。これが、オスマンの支配化でもセルビア正教を守り抜き、自分たちを「バルカンの雄」としての誇りを保ち続ける精神的な支えとなった。そして同時に、この民族の誇りが「大セルビア主義」につながり、その後の歴史の経緯において、クロアチアなど他の南スラブ諸族との深刻な摩擦を引き起こす要因となった事実も、見逃せない。

4. 多民族・諸宗教の混在をもたらしたオスマン進出

1389年の「コソボの戦い」でセルビア王国を滅亡させたオスマントルコは、その13年後の1402年、ティムール軍との「アンゴラの戦い」で大敗し、国力が極度に衰微したため、バルカン進出は一時、中断された。しかし、短期間のうちにオスマン帝国として再興し、1453年にコンスタンティノープルを陥落させ、ビザンツ帝国を滅亡させた。その後は、急速にバルカンに進出し、セルビア、ギリシャを、15世紀末にはバルカン全土を併合して西欧世界を脅かす大帝国となった。

ところで、オスマンとの主戦場となったコソボは、セルビア人にとって「民族の聖地」の意味合いを持つことになった。イスラム教徒であるオスマンは、「經典の民」である東方正教徒・セルビア人に対して、イスラム教への改宗は迫らず、文化的にも比較的、寛大な統治政策をとった。しかし、民族意識の強いセルビア人たちの多くは、その後、時代を経るごとにコソボ地方などを離れて北方へ移動し、ボイボディナやボスニア・ヘルツェゴビナに流入した。さらに北上したセルビア人は、17世紀末には、クロアチアを支配圏に置いていたハブ

スブルク家から、クロアチア辺境部をトルコから守る屯田兵として定住を認められた。

こうした事情から、クロアチアでもボスニアでも、セルビア人の居住地域は地図で見ると、かなり広域にわたるが、実際は、先住者があまりいなかった山岳地や岩の多い荒地などで、経済的条件には恵まれていない地域が多い。

〈コソボ紛争の歴史的背景〉

一方、セルビア人の多くが去ったコソボ地方には、イスラム化したアルバニア人が流入し、残留した東方正教徒のセルビア人を、オスマンの意を受けて代理支配する形となった。17世紀、コソボ地域のセルビア人の北方への大量移住、18世紀のアルバニア人の大量流入により、現在にほぼ近い人口比となった。

1912年の第一次バルカン戦争で、セルビアは5世紀ぶりに彼らの「聖地」コソボをオスマントルコから奪還し、多数派のアルバニア人を支配することになったが、これが、コソボのアルバニア人の間に、セルビア人に対する敵対感情を植え付けたことは否めない。第2次大戦中の枢軸軍のバルカン侵攻で、コソボは一時、イタリアに占領されたが、大戦中、対独パルチザン戦を戦い抜いて、大戦後に、“勝者の発言権”を得たチトーの要求により、コソボはユーゴ連邦の領土となった。こうした、複雑な経緯が、コソボ紛争の深い根となっている。

因みに、コソボ内戦以前のコソボ自治州（人口約200万人）の民族構成は、95年の調査で、アルバニア人74%、セルビア人18%、モンテネグロ人3%等（日立デジタル平凡社『世界大百科事典』）であり、コソボ州のセルビア人側から見れば、多数派のアルバニア人に絶えず圧迫されているという被害者意識が強かったし、アルバニア人側から見れば、セルビア共和国政府が常にセルビア人を擁護し、アルバニア人を押さえ込んでいるという不満が強かった。

チトー大統領の死後、セルビア共和国で「大セルビア主義」が次第に頭をもたげ、80年代末にはコソボ自治州における自治権は奪われ、アルバニア人はセ

ルビアの完全統治下に置かれた。これがアルバニア人の不満とセルビアに対する敵意を募らせ、98年以降のコソボ内戦に繋がっている。

コソボ内戦の経緯については、別の論文で詳述する予定であるが、大量虐殺、強制移住など、ボスニア紛争同様の非人道的「民族浄化」が起きたのは、セルビア人の「民族の聖地」であるコソボに、多くはイスラム教徒のアルバニア人が流入して、圧倒的な多数派となった歴史的経緯が主因である点を、ここでは強調しておきたい。

〈マケドニアの脆弱性〉

また、一時は「中世ユーゴ王国」の首都となったスコピエ（現在のマケドニア共和国の首都）周辺からも、「コソボの戦い」以後、セルビア人の多くは去り、マケドニア正教のマケドニア人と、多くはイスラム教徒のアルバニア人の混住地域となった。

スコピエを訪れると、イスラム寺院と、マケドニア正教教会、カトリック教会が混在する不思議な風景に驚かされる。（現在のアルバニア、マケドニア地域には古くからカトリックも浸透していた。）イスラム教を信仰するオスマントルコは、旧約聖書を“同根”とした「啓典の民」であるキリスト教徒やユダヤ教徒に対しては、彼らを統治下に置いてもイスラム教徒への改宗は強要しない寛容さを示したため、諸宗教の共存が現在まで続いたのである。

ただし、オスマントルコは、イスラム寺院の塔より背丈の高い教会の建設は禁じたという。スコピエのマケドニア正教の教会は地下に広い礼拝堂などがあり、見かけよりはるかに規模が大きいのは、そのためであると、現地で説明を受けたことがある。

スコピエは、スコピエ平原の中央部、エーゲ海へ注ぐバングル川の河畔に位置し、古代から文化の栄えた町だ。7世紀ごろに侵入したスラブ族（多くは現在のマケドニア人）が10世紀に、短期間、「マケドニア王国」を繁栄させたが、ビザンツ帝国、ブルガリア、セルビアなどに支配されて後、14世紀末から約5

世紀にわたりオスマントルコの領土となった。

20世紀になって、バルカン戦争でセルビア王国の領土となり、第2次大戦ではブルガリアに占領され、大戦後にユーゴ連邦マケドニア共和国の首都となったが、5世紀にもわたるトルコ支配時代のイスラム化は今も色濃く残されて、これが旧ユーゴ連邦解体以後、マケドニア人による民族共和国を維持する上で、深刻な脆弱性となっている。

マケドニアの人口200万人のうち、マケドニア正教徒のマケドニア人は60%そこそこといわれ、アルバニア人が30%近くを占め、トルコ人も4%を占める。しかも、アルバニア人はコソボやアルバニアからの不法入国などで、増え続けている。

ここで、マケドニア共和国が91年に旧ユーゴ連邦から独立した後の、受難について、大まかに触れておきたい。

マケドニア政府は、上述した安全保障上の脆弱性から、ボスニア内戦が激化すると、国連PKOの派遣を要請し、国連安保理もこの要請に応じて92年末以降、地域の紛争の波及を防ぐために国連防護軍(UNPROFOR)を、95年3月以降は国連予防展開軍(UNPREDEP)を駐留させていた。しかし、マケドニアが、台湾と国交を樹立したことに反発した中国(国連安保理の常任理事国)がUNPREDEPの駐留継続に拒否権を発動したことから、マケドニアが国連の擁護を最も必要とする時期である99年2月、UNPREDEPは撤退に負いこまれた。

98年春から深刻化したコソボ内戦で、コソボなどからのアルバニア系難民が、マケドニアのアルバニア系住民を頼って、大挙押し寄せた。しかも、難民に混じって、武装した「コソボ解放軍(KLA)」も不法入国し、マケドニア国内で「民族解放戦線(NLA)」を組織してコソボに近いマケドニア北西部の村などを占拠して、マケドニアの軍、警察と軍事衝突するという事態となった。

マケドニア内戦を防ぐため、2001年夏、NATOはNLAの武装解除などを任務とする3,500人規模の多国籍部隊の派遣に踏み切ったが、マケドニアの治安回復は手間取りそうである。マケドニアは、今後も「歴史的遺産としての脆弱

性」に、悩まされることになりそうだ。

〈山間で戦い抜いたモンテネグロ人〉

なお、モンテネグロ人はセルビア人とほぼ同族で、主に「コソボの戦い」以後、ディナルアルプス山系の険しい山岳地帯のモンテネグロ（「黒い山」の意）を拠点としてトルコ支配に抵抗し続けた。地形が、侵攻する側に不利だったことや、トルコ側が戦略的・経済的重要性のある地域とみなさなかったこともあって、モンテネグロが、オスマン帝国に完全支配された時期はほとんど無かったと言えよう。

因みに、モンテネグロ人は極めて長身、頑健な体格で知られる。筆者が70年代、最初にこの共和国の首都チトグラード（現在のポドゴリツァ）を訪れた時は、まさに巨人国にさまよい込んだといった驚愕に襲われた。かれらモンテネグロ人たちも、自分たちのこうした容貌を誇りにしている。「山岳地帯の厳しい生活条件の中でオスマンと戦い続けたから、強健な者だけしか生き残れなかったのだ」と、現地で何度か聞かされた。加えて、山間部に孤立し、多民族との混血がほとんど行われなかったことも、“巨人族”が生まれた理由として挙げられよう。

旧ユーゴ連邦が解体した際、モンテネグロ共和国だけは、人口わずか70万人そこそこのうえ、経済面でもセルビアに依存せざるを得ない貧困地域だという事情もあって、セルビア共和国が実質的に政治を牛耳る新ユーゴ連邦に留まった。しかし、98年に起きたコソボ内戦以来、「大セルビア主義」への反発が強まり、連邦離脱の動きが強まっている。

5. 「民族」としての「ムスリム」

旧ユーゴ紛争を複雑かつ凄惨なものにしたボスニア・ヘルツェゴビナ（以下、ボスニア）におけるムスリム（イスラム教徒）の起源とその特殊性に言及しておかねばなるまい。

彼らは1971年のユーゴ連邦の国勢調査から、自分たちを民族名として「ムスリム(イスラム教徒)」と名乗り始めた。現在もボスニア人口の40~45%をムスリムが占めている。彼らは、トルコ人との多少の混血はうかがえるが、セルブ・クロート語を用いるクロアチア人やセルビア人であり、カトリックのクロアチア人、東方正教のセルビア人と自らを峻別する意識のもとに「ムスリム」と名乗っている。自民族の名称として「イスラム教徒」を名乗っているのは他に例がなく、一見、奇妙かつ不可解だが、宗教の違いによって南スラブ人たちの民族性が大きく分岐してきたバルカンの歴史、さらに、欧州に属するバルカン半島のほぼ中心部に“イスラムの孤島”が存在するという特殊性を考えれば、かれらが自らのアイデンティティーとして「ムスリム」と名乗る心情も理解出来よう。

中世のボスニアは、北のオーストリア、ハンガリーなどのカトリック勢力の南進と、南のビザンツ帝国など東方正教の北進の衝突点にあった。ボスニアの領主や貴族たちは、どちらかの宗教に帰依することは、政治的にもどちらかの支配に屈すると考えたためと推察されるが、12世紀初めころから、東西両キリスト教会から異端視される「ボゴミール派(Bogomils)」に帰依した。この異端宗派を殲滅するために、ハンガリーなどから十字軍も派遣されたが、ボスニアの領主たちは、山岳地帯の複雑な地形を利用して抵抗し、後には「ボスニア教会」として、国教化している。

だが、ボスニアの領主たちは、このために、東方正教のビザンツ帝国とカトリックの神聖ローマ帝国の双方から、「異端の地」として軍事侵攻を受け、断罪されるという“悪夢”に悩まされ続けることになった。

15世紀中葉にビザンツ帝国を滅ぼしたオスマン帝国のスルタン・メフメト2世(「征服帝」, 在位1451~81年)が、ボスニア地域に軍を進めた際、ボスニア国王ステファン・トマシェビッチ(在位1461~63年)は、「ボスニア教会」を破棄してローマ教皇側の支援を求めてオスマンの軍勢と戦おうとしたが、上記のような事情から、領主たちの一部は国王に組みせず、無血開城してオスマン軍

を招き入れた。これにより、オスマン軍は極めて容易にボスニア進出を果たした。⁵⁾1463年にトルコはボスニアを、その20年後にはヘルツヴェゴビナも征服した。

そして、一部のボスニアの領主たちは、おそらく先祖伝来の土地と特権的地位を守る目的から、ボゴミール派からイスラム教徒に改宗した。その後、農民たちも、次第にイスラム化することになった。つまり、「ボゴミール派」信仰が、ボスニアの広域をイスラム化する要因となり、これが、冷戦終結後のボスニア紛争の際に、3宗教三つ巴の、複雑かつ凄惨な戦闘や「民族浄化」を招く最大要因となったのである。

〈ボゴミール派とは〉

東方正教、ローマ・カトリック両者がボゴミール派を極めて危険な異端とみなしていたのは、両教会の聖職者の権威や世俗への関与を正面から否定するいわば“無教会派ピューリタニズム”に徹した禁欲主義を主張し、下層階級、非支配層への強い布教力を持っていたからであろう。

ボゴミール派の教義については、この宗派が絶滅されて信者側の記録も多くは焼かれてしまったため、明確にはつかめず、十字軍側の記録や、宗教裁判の記録、信者の子孫などへのわずかに残された伝承、風習などから、(おぼろげな)全体像を描き出す以外にない。

Bogomil (スラブ語で「神に愛されし者」の意) が教祖の名だったか、宗派の総称だったかも不明だ。同派は、また「パウロ派」と呼ばれる宗派とも似た教義で、パウロ派と同一視されたこともあるが、この「パウロ」もキリスト教の使徒パウロとは無関係とされている。

「ボゴミール派」は、キリスト教と同時期に地中海世界で起こったグノーシス宗教思想運動やマニ教などの影響を受けた二元論的な教義で、ロシアかアルメ

5) エドガー・ヘッシュ、前掲訳書、p.115

ニアが発祥の地とされるが、10世紀頃、ビザンツ帝国を圧倒するまでに繁栄していた古代ブルガリア王国に広まり、その後、ビザンツ帝国にも浸透した。

教義そのものは、キリスト教の1宗派とみなすのは不適切と思われるほど非キリスト教的側面が多い。

たとえば、ボゴミール派は、二元論的世界観から、物質的世界は全て悪魔によって創造されたと説き、「父（神）と子（神の子イエス）と聖霊」の三位一体説も否定し、洗礼、聖さん式などの教会儀式を否定するばかりか、教会施設そのものの存在意義も認めなかった。十字架も不吉とみなした。そして、結婚制度、肉食、飲酒なども「悪」とみなす、禁欲主義的な倫理観に徹した⁶⁾。

ボゴミール派が古代ブルガリア王国に根を下ろした経緯について、ハンガリー人の歴史家、アンリ・ボグダン氏は「ビザンツ帝国との関係があまりにも緊密になることに反発したブルガリア教会の一派が、伝統的キリスト教を捨て、マニ教の流れをくむボゴミール派にはしった」⁷⁾としている。

ブルガリア王国でボゴミール派が急速に信者を増やしたのは、王国の最盛期を築いたシメオン帝（在位 893～927）の死後、周辺諸国との戦闘で国力が疲弊し始めた時期である。ドイツ人の歴史家ヘッシュ氏は「反教会、反聖職位階制で過激なボゴミール派の予想外の成果の背後には、明らかに国家と教会の支配体制に反対する大衆社会の抗議があった」⁸⁾と指摘している。

ボゴミール派は11,12世紀にかけてビザンツ帝国とその周辺地域に異常な勢いで信徒を増やしたため、為政者と教会は、非常な脅威を感じて同派の殲滅に努めた。この時期、1,100件にもものぼる宗教裁判、投獄、処刑などが行なわれたとの記録がある⁹⁾。

ボゴミール派の信仰は、12世紀後半から北西へと伝播したが、セルビアにおいては厳しい異端狩りが行なわれたこと、またセルビア正教がセルビア人の強

6) *The New Encyclopaedia Britannica 15th Edition*, "Bogomils" の項, 1980 年

7) アンリ・ボグダン, 高井道夫訳, 『東欧の歴史』, 中央公論社, 1993 年, p. 47

8) エドガー・ヘッシュ, 前掲訳書①p. 64

9) *The New Encyclopaedia Britannica 15th Edition*, "Bogomils" の項

い拠り所となっていたことなどから、ほとんど痕跡を残していない。

しかし、ボスニア地方では、領主や貴族たちが、この異端宗派に改宗し、「ボスニア教会」の名で農民たちにも広く布教された。

ボスニアは、バルカン半島のなかでも、とりわけ山深い地域だったためか、10世紀中葉からセルビア地域とは、政治、文化的にも切り離されていた。東方正教を受容したセルビアに対し、ボスニアは主にハンガリーの支配下に置かれた。このため、ボスニアの北西部はローマカトリック圏、南部は東方正教圏に置かれて、両派の布教争いの“最前線”となっていた。

こうした情勢下で、ボスニアの領主たちが、12世紀後半に南方から布教された「ボゴミール派」を、率先して受容、改宗した理由は、極めて理解しやすい。ボゴミール派の教義は、政治権力と結びついたキリスト教の権威を全面的に否定したものだっただゆえに、この宗派に改宗することで、南北両側からの政治的、軍事的圧迫を退けるための論拠を持つことが出来たのである。

また、地方領主たちは、ハンガリーやビザンツ帝国による支配だけでなく、この地域に、いかなる中央集権的な体制が生まれることをも嫌い、ボゴミール派（ボスニア教会）の位階制の下で同盟を組み、領主たちの権益を守ろうとしたのである。

（なお、バルカン史に詳しい柴宜弘氏が近著の中で、ミシガン大学のJ・ファイン氏の「ボスニア教会は孤立化によって独自性を強めたもので」ボゴミール派との共通性は立証し難い、とする新説を紹介しているので、ここに併記しておきたい¹⁰⁾）

〈特権を温存したボスニア支配層〉

ボスニアの領主たちがボゴミール派からイスラム教に改宗した後は、彼らの領地の農民層も、次第にイスラムに改宗し、ボゴミール派の信徒は、この地から全く姿を消した。そして、領主たちは、オスマン支配の時代を通して、支配

10) 柴宜弘編，前掲書，②p. 119

層としての権益を保持し続けた。

ボスニアではサラエボに次ぐ第2の都市、モスタル（「橋のある町」といった意）は、オスマンの地方長官の居住地だったとされるが、1560年代、オスマンの技師によって、カルスト地形の平地を深くえぐったネレトバ溪谷（ネレトバ川）に半円形の石橋が架けられ、以後、東西、南北間の通商の要路として栄えた。この大規模な石橋建設も、イスラム教徒に改宗して恭順の意を示した領主、住民に対する、オスマン帝国の褒賞といった意味合いもあるとされている。

因みに、オスマンの土木技術の粋を今に伝えるこの石橋も、ボスニア内戦下の93年、モスLEM側とクロアチア人との激戦の際に、砲撃で破壊された。97年から復興工事が行なわれている。

オスマンのボスニア支配の時代に、イスラム教徒に改宗した領主たちは、クロアチア人、セルビア人たちからの徴税など、厳しい代理支配を続けたと伝えられる。これが、ボスニアのクロアチア人、セルビア人の間に、イスラム教徒に対する強い反感や敵対意識を植え付けたといえよう。

ところで、オスマン帝国は第2次ウィーン包囲（1683年）以後、バルカン支配が揺らぎ始める。オーストリアはベネチア、ポーランドと「神聖同盟」を結んでオスマン帝国に軍事対決を挑み、17世紀末には、バルカンの多くのオスマン領土を奪回した。

また18世紀になると、富国強兵化したロシアが、衰退の兆しを強めるオスマン帝国の領土や権益を脅かし始める。ロシアはまた、オスマンのバルカン統治を揺るがすために、バルカンのスラブ諸族に対し、東方正教徒としての連帯意識を強調して、セルビアなどの独立運動を支援するポーズをとり、バルカン情勢が激しく変化した。

こうした情勢下、ボスニアのイスラム教徒たちは、オスマン帝国というパトロンを失っていった。つまり、バルカンの西北部に位置するボスニアに、元々はクロアチア人、セルビア人である「イスラム教徒集団の飛び地」を残すことになった。

む す び に

「南スラブ族」の最多数派であるセルビア人は、トルコ支配に対する蜂起を繰り返し、1830年にはオスマン帝国から完全な自治権を容認され「セルビア公国」を名乗った。その後は、セルビア人の実質的支配による「セルビア人クロアチア人スロベニア王国（後のセルビア王国）」を建国（1918年）した。しかし、これによりバルカンに平和が訪れたわけではなく、列強の干渉と、諸民族のナショナリズムが過激の度を増していく。こうして、バルカンが「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれるまでに危機地帯化するが、その経緯については、次の論文で詳述したい。

筆者はこの小論文で、「第2次大戦後の欧州における最も悲惨かつ大規模な武力紛争」となった、旧ユーゴ地域 of 諸紛争の歴史的背景について、とりわけ、集団虐殺をはじめとする、むごたらしい戦争犯罪を生むに到った歴史的要因に焦点を当てようと、近代までのバルカン史をたどってみた。

無論、どの大陸も、半島も、列島も、ほとんど例外無く、悲惨な戦争や虐殺の歴史を持つ。人類の文明史とは、「戦争による発展史」と言い換えることができるかもしれない。だが、バルカン半島、とりわけ旧ユーゴ連邦地域は、格別に悲惨、壮絶な戦争と殺戮の歴史で特色付けられている。その特異な地政学的条件に縛られ、和解や統合への道を断たれ、雑多な民族間の対立関係や、「憎悪の関係」を時代と共に深化させ、21世紀にまで持ちこんでしまった。

二年前（2000年）他界されたバルカン問題の研究家、木戸蒨氏は、著書『バルカン現代史』の書き出しで、「民族とは、自分たちの先祖に対して抱く共通の誤解と、自分たちの隣人に対して抱く共通の嫌悪感によって結びつけられた人びとの集団である」という欧州の諺を紹介し、「バルカン半島の歴史ほど、この諺を忠実に立証してきたものはないといってよかろう」と指摘している¹¹⁾。筆者も、まさに同感である。

11) 木戸蒨、『バルカン現代史』、山川出版社、1977年、p. 2